

ひとりひとりの子どもを見つめて ④

赤羽 美代子

今月は、直接、現場のお話ではありません。平凡に一人の人間として生きてきた、私の一番身近な人の、ある日、ある時の様子を記すことに致します。特別に書き記す事柄ではありませんが、これらを通して、日ごろの保育をもう一度、考えてみたく思いました。

私の母は、去年八十八歳の米寿を迎えました。我が家に嫁してより、七十年の歳月が流れ去ったとの事です。幸い健康に恵まれ、我が家の食事の仕度、掃除、濯ぎ洗濯（頑固にも盥洗器を使用を本当に楽しそうに致します。特に洗濯の時には、あの子は最近忘れっぽいとか、あの子は浮かぬ顔をしていたがと、（注・あの子とは、母の子どもたちで、全員中年齢者）ひとりひとりの子どもたちのことを考えながら、濯ぎ洗濯をするのが楽しみなのだそうです。（親不孝者が、一夜洗濯物を水に

漬けたれますと、翌日布が目染み入るように洗い上がって、きちっと畳まれています）

ある日、母の曾孫（生後五か月）Sを一時間程、我が家に預かることになりました。母は目を細くして喜び、昔取った杵柄かなのでしょう。Sをゆったりと懐に抱き込みました。Sは授乳後で気分は爽快の様子です。お乳の香を部屋いっぱい漂わせ、曾祖母に抱かれ満足気に、年老いた老人の顔をじっと見つめるのです。母も大いに満足の様子です。抱きかかえたSの腰を、静かにポンポンと叩きながら「Sちゃん、お婆ちゃんね、じょうずにお歌が唄えないのよ。だからお話を上げてみましょうね」と、昔話をポツリ、ポツリと語り始めました。

「昔、昔のお話ですよ。ある所にお爺さんとお婆さんがおりました。………。おやあ、大きな桃がドンブラッコ、ドンブラッコと流れてきましたよ」Sは身体力を緩ませて、曾祖

母の上で、いかにも僕聞いているの、という風情です。私も、いつの間にか母に抱き込まれた赤子のように、母の語るリズムの中に流れ込んで、二人の調和の世界に引き込まれてしまいました。「桃太郎さん、桃太郎さん、お腰に着けている物は何でござる」母は、自分の身体を揺り籠にして、昔話を語ります。

Sは時どき相槌を打つかのように、母の昔話に相の手を入れるではありませんか。こんな具合なんです。

「桃太郎さん、桃太郎さん」母は、Sが桃太郎であるかのようにSに呼びかける。(S・無心に口元をほころばせて、オックン・オックンと、相槌を入れる)「お腰に着けた物は何でござる」(S・手足を宙に振って、ウー、ウーと声を出す)「お腰に着けた黍団子、一つ下さいお供します」(Sは、母の語る昔話の区切りに、間を外してはならじと、全身で母の語りかけを待っていたかのように小さな口を前に突き出し、目を丸くして、アプブ・アプブ)

私は、Sのそんな仕草がおかしくまた可愛くて、私まで母の呼びかけを待つ始末です。やがて昔話もいよいよ終局の頃、Sは心地よい興奮のためか、天使の誘いがあったのか、母の胸にポテリと頭を持たせて、ネンネのお国へ出発してしまいました。

ふと私は、タイムトンネルの中で遊んでいた自分に気づきました。私も母の懐の中において、赤子になったような錯覚に囚われていたのです。急ぎSを寢床に就かせますと、真赤な頬の寝顔を母はじっと見守りながら、Sになお語りかけています。「Sちゃんや、丈夫で大きくなるのよ。良い子だ、良い子だ」

私は、この平凡な時間の流れの中で、いつか、どこかへ置いてきた「大切な塊り」が、再び私の内に納まったような、満足感と安定感を覚えました。

そして、日頃の保育にこの事を帰して考えてみますと、先ず、教師と子どもとが、木の枝と小鳥のように、花に降りそぐ慈雨のように、落ちていて満たされた子どもとのかかわりがあったでしょうか。母がSの幼い魂に宝庫をつくったような大切な時間と、必要な手間を省いてはいなかったでしょうか。むしろ、人材造りの教育に引きずられてはいなかったか反省させられました。

保育の学問からはほど遠いひとりの老母が、一片の保育の神髓を、人間同志の關係を通して伝えてくれたように思われました。

(靈南坂幼稚園)